



エディットフォース株式会社

住所：福岡県福岡市西区元岡 744 九州大学 ウエスト5号館 430 号室
 代表者：代表取締役社長 小野 高
 事業内容：遺伝子編集技術を用いた医薬品開発及び PPR プラットフォーム技術の提供
 H P : <https://www.editforce.co.jp/>



Q1: 参画の背景

当社は、2015 年に、KISCO(株)と九州大学大学院農学研究院中村教授らで設立された大学発ベンチャーで、筆頭株主が事業系の会社である点は少し特徴的です。私は、2018 年に当社に参画しました。当社参画までは、創薬バイオベンチャーや総合商社に在籍し、経営や事業開発、バイオベンチャー投資などに従事したことから、投資する側とされる側を経験しています。当時、当社はまだ珍しかった RNA を編集することに取り組み、RNA を編集できるツールを持っている点が最大の魅力で、医学分野で非常に重要な位置を占めることができる技術分野だと感じたため参画しました。

参画当時、当社は医薬だけでなく、農業やケミカルプロダクションといった DNA/RNA の編集に関わるものは全て対応できる、というように打ち出していました。一方、私は、何でもできるということは何もできないということとイコールであると考えており、徐々に会社としても何かに特化しなければいけないという判断を行い、医薬に特化する形で今に至ります。研究成果も産業実用化しないと意味がありません。最終的に、どういった形で産業に貢献できるかということを中心に考えてスケジューリングを含めて進める必要があります。

Q2: 当社の強みと特許戦略

当社の一番の強みは、九州大学の研究成果・特許をもとに開発した独自技術「PPR プラットフォーム技術」です。代表的なゲノム編集技術「CRISPR/Cas9」の場合、高額な実施料が必要となりますが、当社は独自の RNA 編集技術を保有しているため、実施料を負担する必要はありません。パイプライン（開発候補品）のライセンスアウト活動を進める中で各製薬企業から基盤技術についてよく質問されますが、事業を推進するにあたり他社の知的財産を利用する必要はないと答えています。

また、ビジネスモデルとしては、M&A や IPO といった EXIT も見据え、パイプライン型とプラットフォーム型の両方を組み合わせた形で進めていこうとしています。時間のかかる開発案件であるため、知的財産の取扱いを特許にするのかノウハウで隠すのが重要であり、社内の委員会で議論しながら決めて進めています。

Q3: バイオベンチャーの壁

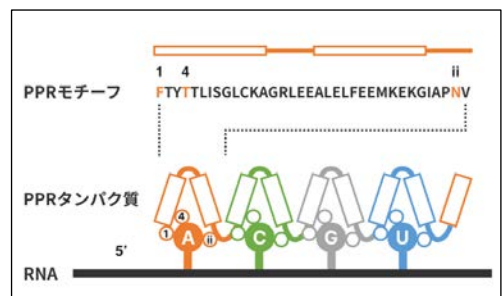
大学とのライセンス契約では、ありがたいことに円滑に交渉・契約をすることができました。前職での経験を踏まえ一般論として言えることは、バイオ分野については開発に時間がかかるため、時間的な間尺が大学等と合わないことはよくあります。コンピューターやソフトウェア分野であれば、1~2年ほどあれば特許を使ってお金が入る形を作り出せることが多いですが、バイオ分野では5年以上かかるため、間尺の目線合わせが難しく、契約内容を修正しながら詰めていく必要があります。

また、人材の確保には苦労しました。九州でバイオ分野の人材を集めるのは難しく、特に製薬会社での勤務経験がある方や CFO 候補となる方を集めることに苦労しました。これから臨床試験に入っていくことから、今後その分野に精通した人材の確保にも注力する必要があると考えています。

また、人材確保に取り組んでいる中で、「ベンチャー」に対するイメージが我々と違っていることもしばしばあります。私は最先端のものを少数精鋭で作っていくイメージを持っていますが、「大企業にいけない人が集まる会社」「自由度がある会社」というイメージを持っている人が多いように感じており、マインドを変えていくことも重要ではないかと考えています。

Q4: 今後の展望

当社は設立10年になり、無限に資金調達できるわけではなく、当初から投資いただいた方々に EXIT の機会を提供するというのはそんなに遠い未来ではないと思っています。EXIT しなければいけない時期、当社のアセットと企業価値評価を比較して、どこでどのように出るのがベストなのかということを中心に常々周辺の環境を見つつ、判断することが必要だと考えています。



10年後の目指す姿

病気にならないようにする医薬や医療の
 進歩の一助となることを目指していきたい。